

甲虫 ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 61 May, 1983

日本産ヒラタハナムグリ亜科概説

小林 裕和

はじめに この亜科は、他の食葉性コガネムシのグループと区別するのに、非常に見分けやすい特徴の1つとして体が小型であることがあげられる。多くの種類が、10 mm 内外かそれ以下で、15 mm を超す種類はほとんど見られない。ハナムグリ亜科(Cetoniinae)やトラハナムグリ亜科(Trichiniinae)と似る種類も見られるが、前者とは中胸側板が上方から見る事ができない点で、また後者とは後基節が広く隔たっていることなどから区別できる。しかし、触角や口器の構造では、両者とほとんど変わらないことは、この亜科がハナムグリ亜科やトラハナムグリ亜科と系統的に近い関係にあることを示している。

体形は通常幅が広く、背面は平坦でほとんど中高とならない種類が多い。体表には多くの場合、刺毛あるいは鱗毛の束を持つ。雌雄の差は大きく、特に雌では尾端に長く伸びた棘状の特異な産卵管を持つものが少なくない。成虫は、雄は花に集まり花粉などを食べる種類が多いが、雌は生活史のほとんどを朽木内で過ごすものがあり、雌雄によって生活圏を異にする種類がかなり見られる。主として東洋区、エチオピア区に分布し、その他では北アメリカとヨーロッパにわずかの種類が見られるにすぎない。ことに、ヨーロッパでは *Valgus* 属の模式種である *Valgus hemipterus* 唯一種を産するにすぎない。

日本から初めてこのグループを記録したのは、WATERHOUSE (1875) で、日本のほぼ全土に普通に見られるヒラタハナムグリ (*N. angusticollis*) が、ヨーロッパに産する *V. hemipterus* に極めて似た種類として記載された。その後、LEWIS (1887)、ARROW

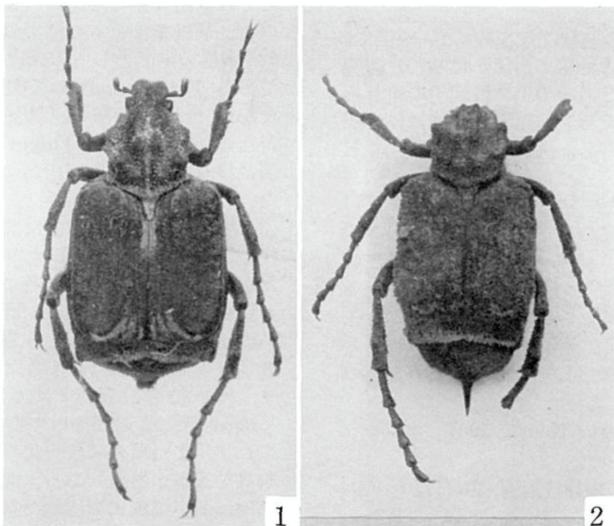
(1913) によって3種が記載された。沢田(1939, 1941)、野村(1952)、中根(1956)等によって新種の記載、並びに属の検討がなされ、現在までに4属6種1亜種が報告されている。これらの中には、屋久島だけに分布する稀種、ヤノヒラタハナムグリ (*Y. planiusculus*) が含まれている。

以上のように日本には、比較的少数の種類しか分布していないので、種の同定はさほど難しくはないが、種の位置づけは時代、著者によ

ってかなり異なり、しばしば所属が変更された種が少なくない。本稿では、これらの属の問題についても検討した。

日本産属の検索表

1. 前脛節は少なくとも5外歯を具える……………2.
- 1'. 前脛節は3外歯を具える。前胸背の側縁には、刺毛を持った4個の突起を持つ。尾節板は幅広く、雄では先端に刺毛の束を、雌では棘状突起を有する……………1. ヤノヒラタハナムグリ属 *Yanovalgus*
2. 前尾節板の後縁には、1対の毛の束からなる突起を持つ。雌は棘状突起を欠く……………3.



ヤノヒラタハナムグリ *Yanovalgus planiusculus*
NOMURA, 1. ♂, 2. ♀.

- 2'. 前尾節板の後縁には毛の束からなる突起を欠く。前脛節には 5 外歯を具える。尾節板は雄では単純。雌では棘状突起を有する……………
 ……II. オオヒラタハナムグリ属 *Charitovalgus*
3. 前脛節は通常 5 外歯を具える。前胸背の幅は上翅の幅に比べかなり狭い……………
 ……III. トゲヒラタハナムグリ属 *Dasyvalgus*
- 3'. 前脛節は 7 外歯を具える (第 5 歯, 第 7 歯は鈍い)。前胸背の幅は上翅の幅に比べやや狭い……………
 ……IV. ヒラタハナムグリ属 *Nipponovalgus*

I. Genus *Yanovalgus* NOMURA, 1952 ヤノヒラタハナムグリ属

本属は、前脛節に 3 外歯を持つなどの点で *Oreodorus* BURMEISTER に似ているが、後跗節第 1 節が第 2 節に比べ非常に長く、雌には棘状突起を具えるなどの点で区別することができる。さらに、*Dasyvalgus* KOLBE, *Valgus* SCRIBA, *Charitovalgus* KOLBE などの各属とは、前脛節の外歯の数などによって区別することができる。屋久島に分布する次の 1 種だけからなる特異な小属である。

1. *Yanovalgus planiusculus* NOMURA, 1952 ヤノヒラタハナムグリ

体長 8~11 mm (雌の棘状突起を除く)。幅広く、上翅はほぼ平坦で、後方で広くかすかに凹む。前胸背は中央に 2 縦隆を有し、その上には刺毛の束からなる各 4 個の小瘤を具える。前尾節板の後縁には灰褐色~褐色の刺毛列を有し、両側には気門が太く三角形に突出する。

分布: 日本 (屋久島)。

本種は、1936 年屋久島の小杉谷で矢野宗幹氏が採集した 1 頭の雄を基に、新属・新種として記載された。小杉谷を中心としておもに花上で採集されるが、個体数はあまり多くない。現在のところ、屋久島以外からの記録がなく、形態的に近い種がほとんど見あたらず、どのようにして屋久島に定着したのか非常に興味深い。

II. Genus *Charitovalgus* KOLBE, 1904 オオヒラタハナムグリ属

従来、我国では本属の種類は沢田, 1941, 以来 *Valgus* 属とされることが多かったが、本属と *Valgus* 属等の近縁属との関係については後述する。東南アジア地域を中心に現在約 10 種が知られる。このうち我国には次の 2 種を産する。

日本産種の検索表

1. 前脛節の第 2 歯は第 1 歯のすぐ後方に位置する。前胸背の 2 縦隆は中央で広がる。雄の尾節板は中央に黄色の縦紋を有する。体長 6~9 mm (雌の棘状突起を除く)……………*fumosus* (LEWIS)
- 1'. 前脛節の第 2 歯は第 1 歯と第 3 歯のほぼ中央に位置する。前胸背の 2 縦隆はほぼ平行。雄の尾節板は通常全体が灰黄色~黄橙色の鱗毛に被われる。体長 6~6.5 mm (雌の棘状突起を除く)……………*laetus* (ARROW)

1. *Charitovalgus fumosus* (LEWIS, 1887) オオヒラタハナムグリ

本種は 1887 年に LEWIS によって、専業 (北海道)、福島、御岳 (木曾)、中禅寺で採集された 5 頭の標本に基づいて *Valgus* 属で記載された。しかしその後、ARROW (1913) が後述の *laetus* を記載した際に彼によって *Chromovalgus* 属に移された。この取り扱いはその後、新島・木下 (1923)、神谷 (1937)、沢田 (1939) 等によって踏襲され、本種の学名には *Chromovalgus fumosus* が使われてきた。1941 年に沢田はインドに産する *pictus*, *fumosus* および奄美大島に産する *laetus* とを比較検討した結果、*fumosus* および *laetus* の 2 種をそれぞれ *pictus* の亜種とすることを提唱するとともに、これらを *Chromovalgus* 属から *Valgus* 属に移した。これに対して、1941 年 ARROW は沢田の考え方に異論を唱え、*fumosus*, *laetus*, *pictus* 3 種の模式標本を比較検討した結果として、これら 3 種をそれぞれ独立種と見做し、*Chromovalgus* 属から *Charitovalgus* 属に移した。また、野村 (1960, 1963) は、*fumosus*, *laetus*, *pictus* の 3 種をそれぞれ独立種として取り扱ったが、属名に関しては沢田の意見に従い *Valgus* 属を用いている。以後、最近まで日本ではこの野村の扱い方が踏襲され、本種の学名として LEWIS が原記載で用いた学名である *Valgus fumosus* が使用されてきた。しかしながら、野村は 1978 年北隆館の昆虫大図鑑の訂正を行なった際に本種を *Valgus* 属から *Charitovalgus* 属に移したが、その理由については何も言及していない。

このように本種の学名に関しては原記載以来、時代や研究者によってたびたび変更がくり返されてきたが、筆者は、本種の学名について次のように考える。まず属名については、既に述べたように過去に *Valgus* 属、*Chromovalgus* 属、*Charitovalgus* 属の 3 通りの扱いが行われてきたが、これら 3 属について、属の特徴を要約すれば次の通りである。まず *Valgus* 属には前尾節板の両側に突出した気門が見られず、また雌の棘状突起の先端には鋸歯状の突起を具える点の特徴である。次いで *Chromovalgus* 属では、前尾節板に突出した気門がない点は、*Valgus* 属と同様であるが、中基節間が非常に幅広い。これに対し、*Charitovalgus* 属では、前尾節板の両側には突出した気門を有し、体形は細長く、各肢も長く、さらに、雌の棘状突起は単純で先端に鋸歯状の突起がないなどの特徴がある。

本種では、前尾節板後縁の両側に鈍く突出した気門があり、雌の棘状突起は単純である。このことから、本種は明らかに *Charitovalgus* 属に含まれるべき特徴を具えていることがわかる。また、種名については、検索表で示したような差異が本種と *laetus* との間に見られ、さらに、本種と色彩や体形が似ている *pictus* では、尾節板がすべて黄色を呈し、前胸背の側縁があらく鋸歯状となることなどから *pictus* とは別種と考えるのが穏当であろう。従って、上述

の事柄を考慮すれば本種は独立した種で、しかも *Charitovalgus* 属に含まれるべき種であると考えるのが妥当と思われる。

いずれにせよ、このように本種の学名がしばしば変更された原因の一つは、1904年に KOLBE が東洋区に分布するヒラタハナムグリ亜科をまとめた際、このグループの多くの種類では雌雄で形態がかなり異なるにもかかわらず、単一の性あるいは単一の個体に基づいていくつもの属を創設したこと、さらに、属の識別点として取り上げた形質がかなりの部分で変化の多いものであったことが、混乱を大きくした要因になっているものと思われる。

分布：日本(北海道, 本州, 四国, 九州), 朝鮮。

2. *Charitovalgus laetus* (ARROW, 1913) オオシマヒラタハナムグリ

本種は、1913年に LEWIS が奄美大島で採集した個体に基づいて *Chromovalgus laetus* として記載されたが、*Charitovalgus* 属に属することは前述の通り明らかである。

分布：琉球列島(奄美大島, 徳之島)。

本種の分布地としては、模式産地である奄美大島の他に徳之島が確認されているが、同島産のものは色彩が奄美大島産の個体とはかなり異なっている。このことについては別の機会に発表したい。

III. Genus *Dasyvalgus* KOLBE, 1904 トゲヒラタハナムグリ属

本属はヒラタハナムグリ亜科の中にあって、種類数の豊富な属の1つに数えられる。インド~マレー地域を中心として、現在までのところ約80種程が知られている。通常、前胸背には2縦隆を有し、毛の束からなる小瘤を具えている。上翅の点刻列は彎曲する。前尾節板の後縁には突出した気門がある。尾節板には毛の束からなる1対の突起を持つ。一方、体型や体長などを合せて形状には変化が多い。我国には現在まで次の1種が知られているに過ぎない。

1. *Dasyvalgus tuberculatus* (LEWIS, 1887) トゲヒラタハナムグリ

体長5.5~7.5mm。通常体上面は赤褐色を呈することが多いが、時として腹面と同じ黒色の個体がある。前胸背には刺毛の束からなる6個の小瘤を具える。前尾節板中央にある1対の黄褐色の毛の束からなる突起は大きく突出し、尾節板先端にも同色の毛の束を有する。

分布：日本(本州, 四国)。

本種は1881年に福島(木曾)および碓井峠で採集された個体に基づいて記載されたが、原記載には前脛節に4外歯を持つと記されている。しかし筆者は残念ながらこれと同じ形態を持つ個体を見たことがなく、恐らく LEWIS は第4歯の非常に鈍い個体についてこのように記載したものと推測している。

IV. Genus *Nipponovalgus* SAWADA, 1941 ヒラタハナムグリ属

1941年、沢田は我国のほぼ全土で普通に見られるヒラタハナムグリ(*angusticollis*)を模式種とする新属 *Nipponovalgus* を創設し、同時に与那国島で採集された新種 *Nipponovalgus yonakuniensis* を発表している。沢田はこの属の創設にあたって、*angusticollis* がそれまで属していた *Dasyvalgus* 属とは前脛節に外歯が7個あること、前胸背の幅が上翅の幅に比べてかなり狭い点等を区別点としてあげている。そして、この属が *Dasyvalgus* 属よりも *Valgus* 属や *Charitovalgus* 属に近いと指摘している。我国では野村、中根等その後の研究者達によってこの取り扱いが踏襲されて現在に至っている。1944年、ARROW はこの *Nipponovalgus* 属について触れ、沢田が区別点としてあげた前脛節の外歯数は種類によって変化が見られるため、属を分つ上での重要性を持っていないと述べ、*Nipponovalgus* 属は *Dasyvalgus* 属から区別できないとしている。さらに、沢田が記載した *yonakuniensis* は、ラオスに産する *Hybovalgus*

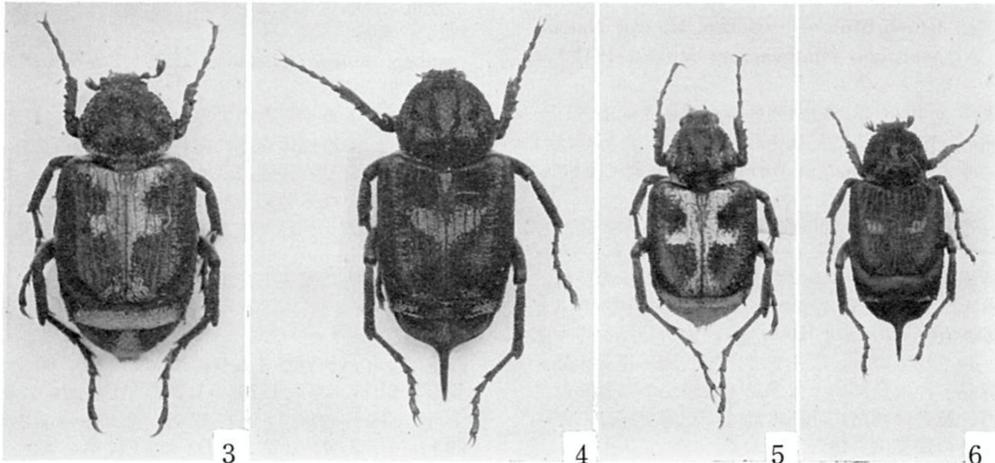


図3. オオヒラタハナムグリ *Charitovalgus fumosus* (LEWIS), ♂; 図4. 同♀;
 図5. オオシマヒラタハナムグリ *Charitovalgus laetus* (ARROW), ♂; 図6. 同♀。

sexdentatus の前脛節の外歯の特徴と同じものであると指摘している。

筆者は、この属について次のように考えている。ARROW が指摘したように、このグループの前脛節の外歯数には変化が認められ、真の *Dasyvalgus* 属の中でも通常の第 4 歯と第 5 歯の間に鈍い突起を持つものが見られる。なお、7 外歯を持つものは筆者の知る限りでは見あたらない。しかしながら、ヒラタハナムグリ亜科全体をながめた場合には、前脛節の外歯の数は、雌の棘状突起の有無に匹敵するほどの重要性があるように感ぜられる。特に前脛節に 5 歯を持つグループでは、雌の尾節板の形状が属を決定するのに重要なポイントの 1 つにあげられている。これらのことから広い意味で *Nipponovalgus* 属を *Dasyvalgus* 属と同じグループとして取り扱うことには異論はないが、*Nipponovalgus* 属に含まれる種の雌の尾節板の形状が、*Dasyvalgus* 属のそれと区別することは難しいことではない。この点を考慮すると *Nipponovalgus* 属を *Dasyvalgus* 属と同じものとして扱う事には、疑問を抱かざるを得ない。

日本産種の検索表

1. 体表には黄褐色～褐色の鱗毛を密に装う。前胸背には刺毛の束からなる明瞭な 6 個の小瘤を具える。前尾節板の後半には黄褐色の鱗毛を密に装い、中央近くに顕著な 1 対の刺毛の束を具える。4.5～6.5 mm. ……*yonakuniensis* SAWADA
- 1'. 体長の鱗毛はあまり目立たない。前胸背の刺毛の束からなる小瘤は不明瞭。前尾節板中央近くの 1 対の刺毛の束も小さくあまり目立たない………*angusticollis* (WATERHOUSE)
 - a. 体色は通常黒色。体上面の鱗毛はあまり目立たず、ほとんどこれを欠く個体もある。体長 4.0～6.5 mm ……subsp. *angusticollis* s. str.
 - b. 体色は赤褐色、腹面および頭頂は時として暗色。体上面の鱗毛は、ややはっきりとする。体長 4.0～5.0 mm ……subsp. *maedai* NAKANE
1. *Nipponovalgus yonakuniensis* SAWADA, 1941 ヨナクニヒラタハナムグリ

本種は 1938 年に琉球列島与那国島で採集された 2 頭の雄個体を基に記載された。一見した外観は台湾に産する *Dasyvalgus formosanus* によく似ている。

分布：琉球列島（沖縄本島、石垣島、西表島、与

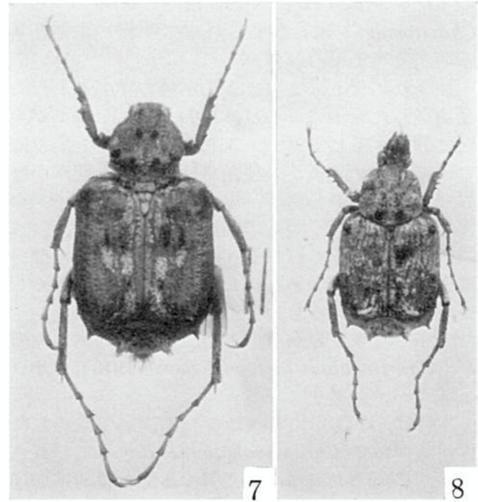


図 7. トゲヒラタハナムグリ *Dasyvalgus tuberculatus* (LEWIS); 図 8. ヨナクニヒラタハナムグリ *Nipponovalgus yonakuniensis* SAWADA

那国島)。

2. *Nipponovalgus angusticollis* (WATERHOUSE, 1875) ヒラタハナムグリ

本種は、次の 2 亜種に区別されている。

subsp. *angusticollis* (WATERHOUSE, 1875), s. str. ヒラタハナムグリ

本種は最初 *Valgus angusticollis* として記載されたが、ARROW(1913)によって *Valgus* 属から *Dasyvalgus* 属に移された。その後、1941 年、沢田が本種を模式種として *Nipponovalgus* 属を創設したことは既に述べた通りで、この取り扱いが現在に至っている。春先から花上に普通に見られるが、雌はほとんどの個体が朽木中より採集されている。

分布：日本（北海道、本州、四国、九州、屋久島、対馬）、朝鮮。

subsp. *maedai* NAKANE, 1956 トカラヒラタハナムグリ

1953 年にトカラ列島中之島で中根猛彦氏自身が採集した 4 頭の雄個体を基に記載された。色彩は、基亜種よりもむしろ沖縄に産する *yonakuniensis* に似ているような点も認められる。

分布：トカラ列島（中之島）。（東京都練馬区）

○沖縄本島におけるエゾカタビロオサムシの記録

日本に広く分布しているエゾカタビロオサムシ *Campalita chinense* KIRBY は、南西諸島からも広く記録されている。現在まで、屋久島・奄美大島・喜界島・沖永良部島・久米島・石垣島から知られており、筆者は新たに沖縄本島での記録を確認したので、その採集例を報告しておく。

- 1♀, 沖縄県国頭郡今帰仁村仲宗根, 19. iii. 1982;
- 1♂, 沖縄県国頭郡国頭村辺土名, 20. iii. 1982. 以

上は共に燈火に飛来したものである。

(奈良市, 富永 修)

訂正：シイバナガゴミムシについて No. 60 (1982) 5 頁右 21 行, 平均 1.20.→1.20, 平均 1.24.; 6 頁左 1 行, (3♀)→(1♀); 同右 12 行, 第 3 条→第 2 条; 同 22 行, (第 2 図)→(第 2 図 D) 以上校正ミスにつき、お詫びして訂正する (編集部)。

○ケプトヒラタキクイムシ分布拡大か

日本に分布が確認されているヒラタキクイムシ科は現在5種であるが、その内の1種 *Minthea rugicollis* (WALKER, 1858) は熱帯原産で、近年侵入定着した種である。

本種は昭和40年に植物検疫で、インドから輸入された豆の木箱から発見された(山崎, 1965)のが国内では最初の記録であり、その時に採集された標本は中条博士によって同定され、ケプトヒラタキクイムシの和名が付けられている。国内への定着は竹村(1964)が鹿児島県下で確認したのが最初で、次いで尊田(1969)が北九州市で確認している。

本種は本来ラワン製材や竹材及びそれらの製品等につき害虫であるが、鹿児島、北九州、広島、岡山、徳島各市の製粉工場のダスト中からも採集されている(溝淵, 1969)。

最近筆者は小田 保氏の御好意により、岡山県下と今まで記録のなかった神奈川県下で採集された本種の標本を検査する機会に恵まれたので報告したい。

岡山県岡山市水島, 1. vii. 1977, 家具のラワン材より2頭; 神奈川県茅ヶ崎市赤松町, 3. vii. 1980, 竹製スダレより5頭, いずれも小田 保採集。

なお、スダレは神奈川県下で購入し、2年後に本種が発生したとのことである。

末筆ながら、標本を御恵与下さった小田 保氏に深謝する。(横浜植物防疫所室蘭支所, 早瀬 猛)

○セマルツヤアリモドキの分布

セマルツヤアリモドキ *Tomoderus clavipes* CHAMPION の分布は本州、四国であるが、太平洋側の東限は現在迄の所、小田原附近である。一方、日本海側はどこまでかと思っているが、筆者の手元には下記の標本があり、石川県ということになる。新潟県のアリモドキ科の目録*には本種が見られず、石川県、富山県附近が東限と思われるが、読者諸君で本種の標本をお持ちの方は発表していただきたい。

(1) 石川県鳥越村河合, 11. v. 1981.

(2) 福井県敦賀市追分, 11. v. 1981.

両者共、田中眞悟氏の採集による。記して感謝の意を表す。

* 野村 鎮(1961): 新潟県のアリモドキ科とナガクチキムシ科, 新潟県の昆虫(VI)

(神奈川小田原市, 平野幸彦)

○アカアシオアオカミキリの趨光性

多数のアカアシオアオカミキリ *Chloridolum japonicum* HAROLD が燈火に飛来した興味深い例を衣笠恵士博士が報告しておられる(1981, 月刊むし, 121号, 32頁)。もうそろそろ苔むす様な古い記録で恐縮であるが、私も同様な経験を聞いているので報告しておく。

18, 福島県大沼郡藤川村新堀(現在は高田町新堀), 15. viii. 1950, 小竹恒雄採集。

小竹氏宅の電燈に飛来した3頭のうちの1頭で、標本は国立科学博物館にある。当時は現在と異って、蛍光灯や水銀灯がなく、民家の電燈は30~60Wの

電球ばかりであった。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○オニダナエントウダマシの採集記録

オニダナエントウダマシ *Danae shibatai* NAKANE は佐々治寛之博士の「日本産テントウムシダマシ科概説(3)」(1980 甲虫ニュース No. 51)によれば、奈良で採集されたものに基き記載され、その後の採集記録を聞かないとの事であるが、筆者は群馬県で採集しているので記録しておきたい。

群馬県武尊山, 1頭, 16. viii. 1981

武尊牧場キャンプ場上のブナ林で、やや細目のブナと思われる朽木をピーティングして得た。尚、同じ朽木でクリバネツヤテントウダマシ *Lycoperdina castaneipennis* GORHAM 1頭、ベニバネテントウダマシ *Mycetina rufipennis* (MOTSCHULSKY) 3頭も採集できた。最後に同定をお願いした平野幸彦氏にお礼申し上げる。(神奈川県川崎市, 沢田和宏)

○宮城県名取川のみズギワゴミムシ類(みズギワゴミムシ分布資料3)

名取川は小東岳を源に東流し仙台市の南を流れ太平洋へ注ぐ河川である。筆者はその河口附近を調査し4種類のみズギワゴミムシ類を採取する事ができた。そのうちの1種ウスモンコムズギワゴミムシは各地に普通であるが、残りの3種は河口附近という特殊な環境に生息する汽水性の種であった。

分布上興味深いものもありここに報告しておく。

26. v. 1981, 宮城県名取川河口, 筆者採集。

1. ギョウトコムズギワゴミムシ *Tachys* (subg. ?) *gyotokuensis* TANAKA 1頭。

本種は1956年江戸川河口(行徳)を基産地として記載された種である。その後田中、山崎により詳細な産地は明らかにされなかったが、四国の瀬戸内海沿岸にも分布する事が報告されている。そのほか JEDLIČKA や中根が簡単に解説している。最近笠原は千葉県歩行虫をまとめた際に本種を図示しさらに夷隅川河口から記録している。また PAWŁOWSKI は北朝鮮から別亜種を記載している。

今回採集された個体は笠原の図と比較して眼が扁平であり頭の溝も異なるが原記載には一致する。

2. ウスモンコムズギワゴミムシ *Tachyura fuscicauda* (BATES) 10頭。

3. キバナガミズギワゴミムシ *Bembidion* (*Desarmatocillenus*) *yokohamae* (BATES) 41頭。

4. ハマベミズギワゴミムシ *B.* (*Peryphus*) *semilutum* BATES 5頭。

本種の分布については、上野が本州(関東以西)、四国、九州の各地から記録している。その後ほとんど記録はなく、また東北地方からも知られていないため、名取川が本種の北限とおもわれる。なお福島県のみズギワゴミムシでも本種を採集しているのであわせて記録しておきたい。4頭, 28. iv. 1978, 福島県鮫川河口, 筆者採集。末筆ながら文献等でお世話になった上野俊一博士ならびに笠原須磨生氏に厚く御礼申し上げます。(東京都港区, 森田誠司)

○ハネカクシの分布資料

Coprophilus 属ハネカクシは *Omaliniinae* (ヨツメハネカクシ亜科) に属する。日本からはこれまでに 3 種が記録されている。本属は通常、樹皮下、落葉下から採集されるが、5、6月に林内を飛翔中のものが採集されることもある。以下の 2 種は比較的珍しいように思われるので報告したい。なお、2) の採集者の嶽本弘之氏に深くお礼申し上げる。

1). セミゾキノカワハネカクシ *Coprophilus impressus* SHARP: 1 頭, 熊本県五家荘久連子, 12. vii. 1970, 直海俊一郎採集。

2). *Coprophilus adachii* (WATANABE et SHIBATA): 1 頭, 北海道足寄町, 24. vi. 1980, 嶽本弘之採集。
(九大農, 直海俊一郎)

○山梨県で採集したタマムシ 2 種

以下のタマムシを山梨県で得ているので報告する。

1. クロヒメヒラタタマムシ *Anthaxia* (*Anthaxia*) *reticulata* MOTSCHULSKY: 1 頭, 山梨県韭崎市円野町, 23. v. 1981, 中山裕人採集。コゴメウツギの花を掬っていた処, 網に入った。

2. カラカネチビナカボソタマムシ *Nalanda ohbayashii* Y. KUROSAWA: 3 頭, 山梨県東山梨郡勝沼町, 13. vi. 1982, 中山裕人採集。オニグルミのスウィーピングで得た。

(東京都東大和市, 中山裕人)

○コブマルエンマコガネは北海道にも産する

いささか古い記録になってしまったが、コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis atripennis* WATERHOUSE を北海道渡島半島で採集しているので報告しておきたい。

1 ♀, 渡島支庁亀田町赤川, 21. vii. 1963; 1 ♂, 亀田町笹流, 10. vi. 1964, 筆者採集。

従来の図鑑や解説等で本種の分布地として北海道があげられたことはないと思われる。なお上記 2 頭は三宅義一氏に御確認いただいた。末筆ながら記して御礼申しあげる。(神奈川県綾瀬市, 西川正明)

○ヒラタアオコガネ, 千葉県の記録

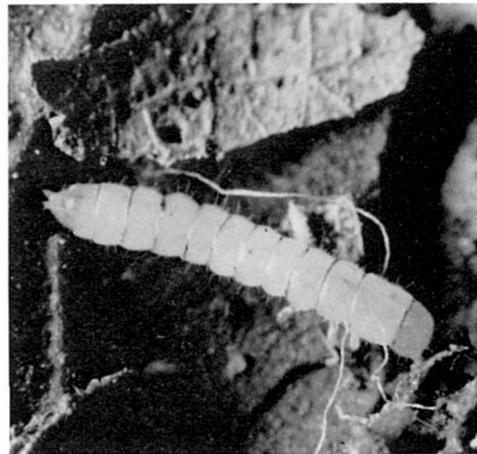
ヒラタアオコガネ *Anomala octiescostata* BURMEISTER は、原色日本昆虫図鑑(保育社)によれば、本州では西部に産し、4~5月に出現するとあり、関東での記録は無いようであるが、筆者は1982年10月28日、千葉県印旛郡に於いて採集したので報告する。当日は約3頭を目撃し、内1頭を採集した。時期は遅いものの晴天で日中気温は可成り高く、虫は活発に飛翔していた。国立科学博物館の黒沢良彦博士のご教示によれば、採集した場所が、印旛郡白井町に近いゴルフ場であることから、客土、或いは植木、芝生などによって移入された可能性も考えられ、出現期の異常もその為に生じたものかも知れないとの事であるが、次のシーズンに見られるか否か興味深いものと思われる。

末筆ながら、同定並びにご教示を頂いた黒沢良彦博士にお礼申し上げます。(東京都大田区, 木村欣二)

○チビヒサゴゴミムシダマシの生態

チビヒサゴゴミムシダマシ *Laena rotundicollis* MARSEUL は落葉の中から発見されることで知られる。筆者は本年5月10日、神奈川県大磯の高麗山のスダジイ・タブ林の林床から採集した成虫の中、3頭を朽ちた落葉の中で飼育した結果、6月上旬に数頭の1齢幼虫を確認した。幼虫は落葉の他、朽ちた小枝も食し9月上旬にはすべて終齢に達し、下旬には小枝などにもぐって蛹化した。10月中旬にはからだはまだ褐色の新成虫2頭を確認した。本種は野外においてもこの時期に新成虫が採集されることから成虫越冬と考えられる。

なお、この林床から採集されたクロミジンムシダマシ *Aphanocephalus hemisphericus* WOLLASTON も飼育の結果、6月上旬に落葉の中に多くの幼虫が出現した。(横浜市港北区, 林長閑)



チビヒサゴゴミムシダマシ *Laena rotundicollis* MARSEUL: 上, 成虫; 下, 幼虫。

○箱根におけるナガゴミムシの記録

箱根における *Pterostichus* 属は、神奈川県昆虫調査報告書(1981)中で平野によって 10 種が記録されているが、筆者の採集品の中に、箱根未記録と思われる 5 種と、採集例の少ない *Trigonognatha* 属 1 種があるので報告する。

1. タナカナガゴミムシ *Pterostichus latistylis* TANAKA

1♂, 上湯～大湧谷, 9. ix. 1978.

2. ウエノオオナガゴミムシ *Pterostichus uenoi* STRANEO

1♂, 1♀, 上湯～大湧谷, 9. ix. 1978.

上記 2 種は山地の水辺に生息する種類で、奥多摩方面では比較的多産するが、神奈川県においては稀なものようである。*P. latistylis* は田尾(1978)が、*P. uenoi* は森田(1972)が丹沢から記録している。

3. ニッコウオオズナガゴミムシ *Pterostichus macrogenys* BATES

1♀, 上湯, 3. vi. 1978. 箱根においては未記録ながら何頭かが採集されているようである。上記の個体は酒れた沢の石下にいたもので、体長 17 mm の中型のものである。

4. ハラトゲナガゴミムシ *Pterostichus spicifer ikutanii* TANAKA

2♂♂, 上湯～大湧谷, 3. vi. 1978; 3♂♂, 2♀♀, 同, 9. ix. 1978.

5. ジュンサイオオナガゴミムシ *Pterostichus pachinus* BATES

1♀, 上湯, 3. vi. 1978. 本個体は近隣の他産地(丹沢, 高尾山, 奥多摩, 大菩薩)のものに比べると、体形が著しく細形である。

6. オオマルナガゴミムシ *Trigonognatha cuprescens* MOTSCHULSKY

1♀, 上湯～大湧谷, 9. ix. 1978. 本種は小田原で採集されているが、箱根では初めてのものと思われる。

(神奈川県川崎市, 田尾美野留)

○イカリゾウムシ属 2 種の採集例

イカリゾウムシの仲間は日本から 2 種類知られているが、いずれも珍品で採集例も少ないので筆者の所有する標本を報告しておく。

1. オオイカリゾウムシ *Euthycus japonicus* HELLER

本種は MORIMOTO (1982) によって奄美大島から 2♂♂, 5♀♀が報告されているが、筆者も下記の標本を所有している。

1♀, 奄美大島湯湾岳, 26. vi. 1980, 山本直文採集。

2. ヒメイカリゾウムシ(新称) *Euthycus inaequalicollis* MORIMOTO

本種は MORIMOTO (1982) によって新種として発表されたもので、その産地として沖縄本島と石垣島を、報告している。筆者は与那国島産の 1♀を所有しているので、新産地として報告する。

1♂, 与那国島祖納, 24. iii. 1976, 有木久之採集。

末筆ではあるが、上記標本を快く提供して下さい。山本直文・有木久之の両氏に深謝する。

(和歌山県有田郡, 的場 績)

○北海道太平洋側地域におけるキベリマルヒサゴコムツキ

キベリマルヒサゴコムツキ *Hypolithus littoralis* ESCHSCHOLTZ, 1829 は、アラスカからアリューシャン列島を通してカムチャッカ半島・日本に至る広い地域に分布する海浜性のコムツキムシで、樺太・千島列島を含む北海道地域のものは別亜種、*H. littoralis convexus* (MIWA, 1928) として区別されている。北海道からは、銭函・稚内・利尻島・知床半島からすでに知られているが、筆者らは従来記録のなかった太平洋側地域から本種を発見することができたのでここに報告しておきたい。

3♂♂, 3♀♀, 北海道浜中郡浜中町琵琶瀬, 18. viii. 1982, 松本英明採集; 1♂, 同, 4. ix. 1982, 松本英明採集。

この地域においては、個体数は決して少なくないようで、砂浜を活発に歩き回っている個体や、砂浜のゴミや板の下に隠れている個体も他にも発見された。

(東京農大, 鈴木 互; 旭川市, 松本英明)



○ドウガネサルハムシの体色

ドウガネサルハムシ *Scelodonta lewisii* BALY, 1874 は関東地方ではそれほど稀な種類ではない。その体色は青色(空色)と銅色(唐金色)の 2 型があるが、私が 1947～1951 年の 5 年間に福島県会津地方で採集した本種はすべて青色型ばかりであったのに、東京地方で採集するものは銅色型ばかりである。

一方、会津地方や山形県の内陸地方で見られるヨモギハムシは全部藍色型ばかりで銅色型が見当たらないが、東京地方では銅色型もかなりの率で見られる。従って、ドウガネサルハムシの体色の 2 型もヨモギハムシと同様の機構によって現れるのではないかと考えられる。近年ヨモギハムシの 2 型の出現率については、鈴木邦雄博士によって全国的に精力的に調査されているが、ドウガネサルハムシについても同様に調査する必要があるのではなかろうか。

なお、本種にはかつてクサギサルハムシの和名が与えられたこともあるが、本種の加害植物はヤブカラシを主としエビヅル、ブドウなどのブドウ科の植物であって、クサギに加害するとはとても考えられない。雑草の根際、石下、落葉下などで成虫で越冬するので、冬期によく採集できる。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○ルイセントウダマシの記録

ルイセントウダマシ *Panamomus lewisi* GORHAM, 1873 は LEWIS が長崎より採集した標本によって新属新種として記載されたもので、熊本、徳島県高越山、福岡県英彦山、同鷹巣山、同犬ヶ岳、同山田市熊ヶ畑、等の記録がある。

本種は落葉下に棲息するため、特殊な採集法を試みないと得られない。

書 評

T. RIGOUT 著 : Les Coléoptères du Monde I, Batocerini 1 (1981). A4 版, 12 頁, 50 図版, 24,000 円。

以前から国立科学博物館にある東南アジア産のシロスジカミキリ属 *Batocera* CASTELNAU, 1840 の標本の種名を同定し整理したく思っていたが、有名な E. GILMOUR & J. DIBB の "Revision of the Batocerini (1948, *Spolia Zeylanica*, 25(1)) はなかなか入手し難く、他に適当な文献もないので、そのままになっていた。今回、後者の文献を入手することができたのを機会に、昨年出版された RIGOUT の著書を大金を投じて購入してみた。しかし、このフランス人の著書には正直云ってすっかり落胆させられてしまった。

まず内容についてであるが、数行の記載とも記述ともつかぬものがあり、それに続いて珍普の別、体長、分布、変異などが、それぞれ別行で述べられている。しかも、それが仏、英、独の3ヶ国語で繰返し述べられているのである。最初の解説頁の仏語を苦心して読み次頁の英語を読んで「なんだ同種説明の繰返しではないか」と思い、次の独語の部分を見てウーとうんざりすることになる。図版は鮮明で写真技術も一流である。しかし、*Batocera* 属の中では最小型種の中の日本のシロスジカミキリが、A4版の図版の真中にたった18だけが実物大で鎮座するなど、恐しく贅沢と云うか、間の抜けたと云うか、我々の常識を外れた図版が目につく。図版に限らず、本文も外装もどこを開いてみても余りにも余白ばかりが目立つ呆れ返った本である。我々がこの種の本を作ったなら、本文も図版も1/3で済み、定価は1/4になったであろう。こうも売らんかなの商魂がむき出しになると、余りにもおぞましく、かえって買う気が起らなくなるのではなからうか。

昆虫の中のある群をまとめたこの種の文献では検索表が付いているのが常識であるが(もっとも、蝶

筆者は落葉下より得られた各地産の標本を持っているので下記に記録しておきたい。

久住(大分県) 25. vii. 1979.

五ヶ棲(宮崎県) 27. xi. 1979.

雲仙(長崎県) 22. x. 1979.

浜玉町(佐賀県) 22. vii. 1981.

標本をいただいた田中真悟氏に厚く御礼申しあげる。(神奈川県小田原市、平野幸彦)

では検索表がないのが普通で、ある方が珍しいが、この本ではどこにもそれらしいものは見当たらない。長々と巻頭から謝辞、序文、緒言、凡例と型通りに続くが、それが、それぞれに仏語、英語、独語と各1頁づつ占領して繰返されるのに、肝心の検索表が見当たらないので、読者は図版によってある程度種名の見当はつけられるであろうが、種の特徴がどこにあるのか、科学的な種の認定は全くできない。この点では、日本に汎濫しているある種の蝶の図鑑とでも同様であるが、読者は種名を調べるには総合せざる以外に方法はない。さらに不便なことは、種内の変異が判らないことである。一応、原記載とシノニムの一部は掲げてあるが、本文に表れる変異はすべて変種(var.)ばかり。ところが図版ではこれが全部3命名式の亜種扱い。おまけに、それではその原記載をと探そうとすると、どこにも見当たらない。どうやらこの著者は、学名の何たるかを知らず、亜種、地方型、変種、型、異常型、個体変異のすべてをこたまぜにして変種(var.)と称しているらしい。同一亜種(図版では亜種、本文では変種)が、台湾とジャワに共通して産したり、同一地域に2亜種産したりする例がいくつも出て来る。一体この著者は学名や分類の何たるかを理解しているのかどうかはなはだ疑わしい。まあ、図版が鮮明で総合せしはもってこいで、最後にちょっぴり参考文献が並べてある点だけが救いとなるであろう。

(国立科学博物館、黒沢良彦)

甲虫談話会

会費(一ヶ年)2000円、次号は7月30日発行予定。

投稿〆切は6月30日

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364)2311、振替東京0-60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000、桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,500、送料一箱につき都内及第一地帯:3個以下¥1,300、4個以上¥850(以下同様)、第2地帯¥1,500、¥950、第3地帯¥1,700、¥1,050、其他、各種器具、針などを製作販売します。カタログを御請求下さい。(¥160)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25
電話(03)811-4547、振替 6-113479

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話(03)409-6401(ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社